

# 2 2 6

こんにちは。塾長の大井です。

6期生受験戦記第11回です。

冬が来ました。もう猶予はありません。そしてチャレンジャーという彼らの立ち位置は変わらず全く楽観が許されない立場でした。彼らには、飛躍が求められていました。

そんな6期生の飛躍の原動力となるよう、合格メダル授与式が迫ってきました。何度か記してきた通り、このメダルは受験後に合格者に授与されるものではありません。受験が目前に迫る12月、年内最後の授業で、私と田宮からこれまでの歴史をふり返り、心からの激励のメッセージをメダルに記して贈るものです。毎年5年生がこれを見守り、6年生が1人ずつ受け取ります。

2018年冬、5期生にはこのメダル授与式を延期したという過去があります。

私たちがいくら言葉や想いを尽くしても、受け取る子どもたちに覚悟がなければ、そんな式は茶番でしかないからです。

それは6期生にも少なからず抱いた危惧でした。誕生日や祝日のように、予定通り執り行われる routine ではありません。機が熟し、想いが熟してこそ意義を持ち得る営みです。

そんな一抹の違和感を感じていた私は、前日に one for all を今こそ示せ、明日メダル授与式をするかどうかは、全員のノートを見て決める、全員がチームとして明日の式の有無を決めるんだと話しました。

その夜は子どもたちとのこれまでをふり返り、一人ひとりの顔を思い浮かべながら、激励のメッセージを何度も練りました。

翌日、全員分積まれたノートをめくりました。そこには、みんなの合格とメダル授与式への想いが文字通り溢れていました。いつもベストを尽くしてきたTくんやYくんは言うに及ばず、普段はマイペースな子たちのがんばりも際立っていました。

普段おっとりでマイペースのMさんはノートにこう書いていました。

「先生は全員のがんばりを見て、明日の式をやるかどうか決めると言った。私が手を抜いてみんなの足を引っ張るわけにはいかない。先生はいつもクラスは全員で one team だって言う。今日私は思った。one

team を作るのは、まずは one= 1 人ひとりの思いからだ。」

そこには普段の何倍もの努力の跡が見えました。

(第 1 2 回につづく)

2020 年 1 2 月 1 5 日

大井 雄之